『赤城義臣伝』と『通俗演義赤城盟伝』

山本　卓

赤穂義士伝実録のうち、片島深淵子武矩編『赤城義臣伝』（外題『太平義臣伝』）は享保四年序（第一序）・刊（刊紀なし）をはじめ諸本あるが、写本で流布することが常道であった実録において、本格的刊本を出刊したことで（幕府より禁書処分とされるが）意義深い。本書は凡例に「此編者通俗演義赤城盟伝ト云書ヲ得テ。之ヲ本拠トシテ。始終本末ヲ叙次ス」と種本があかされている。そこで本稿では『赤城義臣伝』と『通俗演義赤城盟伝』を比較し、「本拠」とはいうものの、具体的にそれはどのような関係であったのかを明らかにしたい。なお、『通俗演義赤城盟伝』は二〇二〇清文堂出版刊『忠臣蔵初期実録集』（拙編）に収録した。

先ず、比較の底本の略書誌を述べる。

『赤城義臣伝』

・大本、十五巻十五冊、柳染色表紙（無地）、刊本

・外題「太平義臣伝」「太平義臣伝　首巻別録　一～十四終」

・内題「赤城義臣伝　首巻別録」「赤城義臣伝　巻之一～十三」「赤城義臣伝付録巻之十四」

・序　あり。第一序、序末に「享保四歳次己亥春／（印）（印）」。第二序、序末に「時享保己亥仲春」／（印）（印）」。第三序（自序）、序末に「時　深淵子武矩識（印）（印）／享保戊戌歳冬窮陰」、後序、序末に「享保四歳次己亥冬／（印）（印）」。

・口絵　あり。「忠義画像」として義士像二十八面と画賛。

・挿絵　なし。ただし、「吉良宅分野之図」「義士墳墓分野」などの図を挿む。

・編者　片島深淵子武矩

・総目録　なし（各巻目録のみ）。
・毎半葉の行数　十一行
・用字　序・後序は漢文。本文はカタカナ（漢字カタカナ交じり）。
・奥付（刊紀）　なし。
・所蔵　架蔵。

他に架蔵する諸本は、

①『扶桑義臣伝』（外題）・『赤城義臣伝』（内題）、半紙本十五巻十五冊、刊本。カタカナ本（底本）の序・後序のうち、片島深淵子の自序を割愛する。序類は漢文ながら本文はひらがな（漢字ひらがな交じり）、カタカナ本の本文を忠実にひらがな化する。もちろんカタカナ本とは別版である。

②『赤城雪心伝』（外題・内題）、中本四巻四冊のみ架蔵（巻五欠）、刊本、口絵なし。カタカナ本を近世木活字化したもの。

③『赤城義臣伝』（外題・内題）大本十五巻十五冊、刊本。カタカナ本に見返しを補刻したもの。見返しには「浪花書房　前川文栄堂梓／慶応四戊辰補刻」などと記す。明治版である。

『通俗演義赤城盟伝』

・大本、十巻十冊，青碧色表紙（無地）、写本
・外題　「通俗演義赤城盟伝　序～九」、ただし、二のみ「（破れ）城盟伝　二」
・内題　「通俗演義赤城盟伝　首巻～巻之九」
・序　あり。序末に「宝永丁亥春二月初四野村逸民採ニ筆ヲ於読書堂ニ」と記す。
・著者　野村逸民
・口絵　あり（大石良雄図像）
・挿絵　なし。ただし、「吉良宅図」「義士墓図」などの図を挿む。
・総目録　なし（各巻目録のみ）。
・毎半葉の行数　十一行
・用字　序は漢文であるが原則として本文はカタカナ（漢字カタカナ交じり）。引用文書・書簡などは漢字ひらがな交じり。
・奥付　なし
・所蔵　佐藤悟氏

それでは実際に章題を対比一覧する。（スペースの関係上、漢文の訓点・送り仮名などは割愛する）

赤城義臣伝	通俗演義赤城盟伝
巻首	
・序類	
・口絵	
巻一	巻一
・長矩任伝奏饗司並加藤泰実異見之事	・長矩充饗司
・長矩刺義英於殿中並意恨濫觴之事	・長矩刺傷義英
・長矩自殺並鉄砲津屋舗領知御朱印被召上事	・長矩伏罪
・蜂闘示凶長矩訃音到赤城並愁訴之事	・闘蜂告凶・長矩凶訃到赤城
・官使武将進発並愁訴到江府事	
巻二	巻一
・良雄忠略並両使帰赤穂事	・良雄報讐忠略
・良雄窃告復讐並戸田之飛檄再到赤穂事	巻二・戸田飛檄到赤穂
・岡島匂大埜大埜奔伊藤之家事	・大野夜奔伊藤家
・江府之俊傑到赤穂並堀部父子由緒之事	・江府三士登赤城
巻三	
・山陰南海之諸侯武備並官使到赤穂事	・両使君入赤穂
・両将被請取赤穂城並城中必死人数之事	・両使君入赤穂
・江府之俊傑等帰府並浪人立退赤穂事	・両使君入赤穂
・神崎則休論不臣詞並義士雁書贈答之事	・諸士非義弁・義士雁書贈答
巻四	巻三
・西山狐窟濫觴並大石良雄到山科事	・西山狐窟濫觴・大石良雄買宅

・良雄寓拾翠庵並長矩墓築瑞光院事	・良雄築長矩墓
・大埜儉金夜犇事	・大埜儉金夜奔
・進藤原赴江戸並良雄初度関東下向之事	・大石良雄赴江府
・義士会議良雄之旅館並不破数右衛門事	・大石良雄赴江府
・義士雁書贈答之事	・義士雁書贈答
・高田軍兵衛変盟約事	・高田違盟
・萱野重次殉死並田光先生之事	・萱野重次殉死
巻五	巻四
・原大高帰洛並雁書之事	・原大高簡三士
・自大高源五忠雄贈江戸之三士状	・原大高簡三士
・自原惣右衛門大坂贈江戸之三士状	・原大高簡三士
・自堀部奥田之二士贈大石良雄之山科状	・堀部簡良雄
・右同日自堀部弥兵衛贈大石良雄之状曰	・堀部簡良雄
・自京師大高源五贈江戸之三士書曰	・原大高簡三士
巻六	
・義士会議山科並良雄変姓名事	・良雄変姓名
・篠崎森之二氏赴関東事	巻五・篠崎森赴江府
・武林隆重省父母並孟子之事	・武林隆重還郷
・原元辰贈書於長江奥田事	・義士雁書贈答
・長江武庸贈原潮田中村大高武林之五人書状之事	・義士雁書贈答
巻七	
・神崎与五郎赴江府並良雄返盟誓事	・神崎赴江府・良雄智謀還盟詞

・堀部武庸上洛 並 浅野稲荷生霊芝事
・義士会議于丸山 並 大学左遷芸州事
・良雄寓四条道場 並 進藤小山避盟事
・義士去妻妾元辰避姻族 並 大埜賊臣之事
巻八
・良雄寄付金於瑞光院 並 寺井玄渓乞東行事
・大石信清兄弟採圃 並 大石主税下関東事
・義士追々赴東都 並 矢頭右衛門七等之事
・良雄遺言瑞光院主 並 軽女弾琴祝羈旅事
・良雄関東下向 並 義士蟠屈于隠棲々々事
・旧士入盟群臣違盟 並 神崎則休絶縷自解之詞事
・義士撰赤城盟伝 並 予譲之事
巻九
・良雄与衆写号令於盟書 並 各心覚悟之令書事
・羽林翁退去嗜茶 並 大高横川以術定夜撃期事
・良雄贈書於瑞光院 併 緋無垢小袖之事
・義士会専岳寺 併 夜撃廟筭之事
・義士出立於三箇所之事
巻十
・義士夜撃吉良館事
・大学左遷芸陽・稲荷神祠生霊芝之
・大学左遷芸陽
・良雄寓洛陽
・義士去妻趨義・良雄寓洛陽
巻六
・寺井医師存義
・良雄質子関東
・良雄質子関東
（巻九・「院主築義士墳」）・大石良雄赴関東
・大石良雄赴関東
・義士感旧入党・諸士違盟弁
・義士撰赤城盟伝
・良雄与士写盟詞
・義英退去嗜茶
・義士会泉岳丈室・義士三所盟会
・義士会泉岳丈室
・義士三所盟会
巻七
・義士夜撃吉良
・義士刺仇班衆事
・義士到泉岳寺而祭首事
巻十一
・吉田冨森之両士訴仙石伯耆守之庁事
・事達台聞 並 官使点検吉良宅事
・官使回金城 並 義士出泉岳寺来仙石氏庁事
巻十二
・義士為囚而属四侯家
・義士拝謁四侯而四侯殊遇之事
・葬吉良上州於盤松院 併 由緒之事
・瑞光院主下向東都再対面良雄之事
・義士伏誅於四箇侯家事
巻十三
・四侯築義士墳墓 併 漢田横之事
・諸士競求義士遺物 併 義士勇功噂 付 子路事
・吉良武衛謫流 併 義士之男子流罪之事
・院主帰洛而建誌石於瑞光院 並 伝神之事
・義士男子御赦免 並 院主勧化之事
巻十四
・大義論
・浅野系譜
・大石系譜
・義士分限
・義士刺殺義英・義士凱陣両国橋
・義士梟首祭墓
・両使聞官庁
巻八・使官点検死屍
・使官回幕府
・四十余人為囚
・幕下百官鞠罪
（巻九「院主築義士墳」）・上杙依病罷兵
巻九・四十六人処刑
・諸侯捐金築墳
・諸侯捐金築墳
・諸男児処流罪
・院主築義士墳
巻首・浅野系譜
・大石系譜付小山系
・義士爵禄

このように一覧すると、片嶋深淵子『赤城義臣伝』は種本の一章を分割しているところや逆に統合しているところ、あるいは章の順序を組み直しているところはあるものの、基本的には種本の構成を尊重しているといえよう。粗筋のアウトラインはほぼ踏襲しているのである。

では文章表現を見てみよう。一例として、最も種本に忠実であらねばならないであろう箇所の一つ、刃傷の場面を比較してみる。（［　］は割り注）

赤城義臣伝	通俗演義赤城盟伝
柁川与三兵衛至候［松ノ廊下］柁川謂テ長矩ニ曰、幕下行礼畢バ告レ我ニ。長矩曰、諾。義英在レ傍ニ謂ニ柁川ニ曰、君ガ所レ議ル何事ソヤ。僕等無レ聞レコト焉ヲ。不レ然ラ恐ラクハ失セン使ノ宜シキヲ長矩少シク知テ之ヲ、色動キ乃チ黙シテ起タツ。義英言テ於列ニ曰ク、鄭野ノ子屢失レ礼ヲ、不ニ亦辱メザラ司賓之選ヲカ。長矩聞テ之ヲ、不レ勝ニ積怒ニ乃チ反ニ呼ヨコト義英ヲ一声以レ刀ヲ撃テ冠ヲ中レ頭ニ血流義英眩惑シテ無レ意。［以上義人録之説］俯ニ倒レケルニ浅野望カカツテ打太刀ナレバ、鋒後ニ余リ刃ハ烏帽子ニ中リテ止リヌ。長矩畳カケテ打ントスルニ梶川与三兵衛蛍立揚リ抑屏テ長矩ニ組ム。	梶川与三兵衛［留主居役］登城シ、将軍家ノ勅答ヲサマリナバ出ヅベシト思ヒ高家衆トトモニ白書院ノ後ノ松ノ廊下ニ並居ラル。カカル処ニ長矩ツツト来リ義英ニ詞ヲカケ小刀ヲ抜キ放ツ。義英ハ周章請合スル心地モナク北ゲ退ント起レケルガ、攻テノ運ヤツヨカリケン、長矩ガ太刀先義英ガ烏帽子ニ中リ北ゲマワル処ヲ追ヒ掛テ討ツ太刀モ同ク烏帽子ニ切付、切先ハ背カニ流ル。痛手ニハ非レドモ義英ハ動顛シ、向ヘカツパト倒レケル。梶川与三兵衛飛ビ掛リ長矩ガ直衣ヲ捕ヘムツト抱キ留ム。

『赤城義臣伝』の引用箇所前半では種本とは異なり室鳩巣『赤穂義人録』によるという。編者深淵子の識見の発露といえようか。引用の後半部も種本とは大筋では同じともいえようが少々異なる文章表現である。これを一例として、『赤城義臣伝』では『通俗演義赤城盟伝』を「本拠」とはするものの、全般的にかなり深淵子の語りがなされているのである。

その点をもう少し見てみよう。京都の瑞光院主は種本『通俗演義赤城盟伝』では、義士切腹の後、巻九「院主築義士墳」の一話に描かれるばかりの一登場人物であるが、『赤城義臣伝』では、少し大げさに表現すると、瑞光院主の主要登場人物化がなされているのである。すなわち、瑞光院に長矩の石塔を建てたことはもちろん（巻八「良雄寄付金於瑞光院並寺井玄渓乞東行事」であるが、種本では巻九「院主築義士墳」にまとめて、「良雄ガ党毎月十四日長矩公廟参ノ次」のこととするのを、『赤城義臣伝』では大石良雄の関東下向直前に、すでに瑞光院主は義士の墳墓を瑞光院に築くことに同意している（巻八「良雄遺言瑞光院主」）。種本では巻九「院主築義士墳」にまとめて記されているが、『赤城義臣伝』では、事は成り、義士たちが四家に預けられた時点で、瑞光院主は東都へ下向して、良雄と会談をしている（巻十二「瑞光院主下向東都再対面良雄之事」）。こ

れは種本でも描かれているが、義士たちの石塔を瑞光院に築いている（巻十三「院主帰洛而建誌石於瑞光院」。（種本巻九「院主築義士墳」）。

『赤城義臣伝』の最後は、院主が義士の勧化を行いそれによって義士の石塔を瑞光院に建立した話で終わっている（巻十三「院主勧化之事」）。勧化は赤穂義士に対する寄付を集めることであろうが、その場では義士の物語を教え導く勧化も行われていたということだろう。すると瑞光院主は赤穂義士伝の勧化をもしていたことにもなり、この物語の語り手にも模されるのではないだろうか。そこまでは読むことが困難だとしても、瑞光院主の重要登場人物化という点は認められるのではないだろうか。そうすると、それは編者片島深淵子がなしたことといえるだろう。

種本にない軽（閑流）の登場人物化も編者片島深淵子のなしたことである。すなわち、『赤城義臣伝』では、大石が伏見の浮橋に馴染んでいたころ、周りが心配して先の瑞光院主に議（はか）り「洛陽二条通寺町ノ辺リ二文字屋次郎左衛門ト云者ノ女（ムスメ）［其名閑流］ノ容色艶ナルヲ納（イレ）テ妾（ヨモヒモノ）トス。良雄甚ダ此女ヲ愛幸（アイコウ）ストイヘドモ未ダ伏見ノ里ノ浮橋ノ中絶ズシテ……」（巻七「神崎与五郎赴江府並良雄返盟誓事」）という、種本『通俗演義赤城盟伝』にない一文が挿入される。其名閑（カル）流であるが、この人物が後に一場を構成する。すなわち、『赤城義臣伝』巻八「良雄遺言瑞光院主並軽（カル）女弾琴祝羈旅事」では、大石のいよいよの東都下向に際し、先の瑞光院主は大石と共に瑞光院を立ち出で「二条寺町辺リナル良雄ガ寵（イツクシミ）深カリケル二文字屋ノ軽（カル）女ガ家迄見送リテ院主ハ紫野ニゾ帰ラレケル。斯テ二文字屋ガ一家ハ良雄ノ東行ヲ不審（イブカリ）ケレバ名残ヲ惜ミ羽觴（サカヅキ）を勧テ旅行ヲ祝言（コトブケ）ドモ、軽女ハ打シホレテ燈暗シテハ数行虞氏ガ涙ト口ズサミケレバ、良雄斯ル目出度首途（カドデ）ニ数行ノ涙トハ思寄ズヤ。夫常々手馴シ調（シラベ）和ヲト申ケル時、軽（カル）女琴ヲ引ヨセテ七尺ノ屏風ハ踊ルトモヨモ踰ジ。羅綾（ラレウ）ノ袂ハ引バナドカ截（キレ）ザラント唱歌を変、爪音に殺勢（サッセイ）を籠テ弾ケレバ良雄心ニ喫ヲ含ミ「珍シノ今ノ一曲ヤ。哀実（アワレゲニ）武蔵鐙流石ニカケシ余波ノ袂ヲト引離シテゾ立出ケル」として、一場を形成するのである。「仮名手本忠臣蔵」以前のお軽の姿である。これも種本『通俗演義赤城盟伝』には見えないものであり、出所は不明ながら、『赤城義臣伝』の語り、すなわち片島深淵子の語りなのである。

『赤城義臣伝』では、「編者云」「編者淵子が曰」などとして、編者の主張・論理が一二丁の長きにわたり展開するところが随所にある。編者の議論が、編者の名前で堂々となされているの

である。片島深淵子の識見の発露といえよう。深淵子の語りの例である。

これらのように、文章表現ではかなり深淵子の語りがなされているのである。

まとめると『赤城義臣伝』は、凡例で『通俗演義赤城盟伝』を「本拠」とするとあかしているが、その構成においては基本的には種本『通俗演義赤城盟伝』を尊重しており、粗筋のアウトラインはほぼ踏襲している。一方、その文章表現については、「本拠」としつつも種本『通俗演義赤城盟伝』とはかなり異なる文章表現がとられ、深淵子の語りがなされたものと認められる。「本拠」と称するのは実際にはこのような関係であったのである。

〔付記〕佐藤　悟　氏にはご所蔵の『通俗演義赤城盟伝』を長期にわたり恩借させていただき、比較の底本とさせていただきました。記して、篤く御礼申し上げます。

（やまもと　たかし／本学教授）